学苑　第九〇〇号　二〜九（二〇一五・一〇）

御伽草子『雨やどり』試論

大倉　比呂志

一　〈橘〉と〈扇〉の表象性

按察大納言女（以下、按察姫君と称する）は二歳の時、母を失った後、按察大納言が新たに北の方を迎え、二人の姫君が誕生したために、「この姫君たちの御かしづきばかりにて、大姫君（按察姫君）は、常に乳母のもとにぞ、住み給ひける」（上・五五四）[注①]状況であり、乳母が按察姫君の世話をしたのである。乳母は按察姫君が十五、六歳の時、鞍馬に参詣するように勧め、二人で出かけるわけだが、そこで按察姫君に初瀬に参詣すべきであるという夢告があったために、初瀬に赴いた帰途、五条付近で雨に降られ、雨宿りをすることになった。これは『雨やどり』の冒頭部の紹介であるわけだが、その場所は男主人公である右大将の息子中納言（後に大納言）の乳母の家で、偶然来合わせた中納言が室内に按察姫君を招き入れて、強引に契りを結ぶ。その乳母の家のありさまは、

①この宿の橘いと盛りなると見えし所に、雨は晴れもやらず、思ひわづらひて、たたずみ給へるところに、……（上・五五五―五五六）

とあり、「橘」が植えられていたと語られている。中納言との情交後、中納言は参内する前に、後朝の歌「早苗取る田子ならねども中立ちて根見てぞ深き契り知らるる」（「根」に「寝」をかける）を贈り、按察姫君は応えようともしなかったが、乳母に説得されて、「扇のつま」に「名のみして生ふる早苗の深くしてひかれにけるぞ悔しかりける」（以上、上・五五八）の歌を返歌とした後、按察姫君は帰宅するわけだが、中納言が乳母の家に戻ってみると、按察姫君の姿はなかったので、

②中納言、「本意なくも、帰しつるものかな。せめていづくとも、見おくる事もなくて、なにをしるべに、尋ぬべき」とて、嘆かせ給ひて、妻戸のほとりを見給へば、散りたりし橘に、姫君（按察姫君）の御手とおぼしくて、

散りぬればくやしかりける橘の香を知る人もあらじと思へば

とありしを、取り上げ見給ふに、いとど伏し沈み給ふを、……

（上・五五九―五六〇）

とある。〈橘〉は例えば「さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」[注②]（古今集・夏・一三九・よみ人しらず）に代表されるように、香と強く結び付けて用いられているわけだが、〈橘〉の葉に按察姫君の残された歌を見て、中納言は悲嘆にくれるのである。

③かくて、ここ（注―中納言の乳母の家）に籠り居んも人目つつましくて、（中納言ハ）扇と橘を御袂に入れさせ給ひて、出で給ふ。（上・五六〇）

のごとく、中納言は按察姫君の歌が書かれた〈扇〉と〈橘〉を形見として持ち帰り、

④中納言は、日数積もるままに、思し嘆きて、神仏に御祈りはひまもなし。あり し扇と橘を取り出で、御覧じて、御涙せきあへさせ給はず。（上・五六一）

とあるように、中納言はそれらを見て、按察姫君を恋慕するのである。

その後、按察姫君は秘密裡に中納言との間の子である若君を出産するわけだが、同時期に女御（後に中宮・女院）の出産した皇子が鬼子であったために、女御の乳母（按察姫君の乳母の姉）と女御の母は策略を施して若君と鬼子を交換して、若君は春宮（後に帝）となり、その世話役として按察姫君が御匣殿に任命され、出仕することになる。

⑤さても、御匣殿一夜の雨宿りし給ひし中納言を、御簾のうちより、見出だし給ひて、一夜の仮枕にかかる御子いでき給はんとは、いかでか知ろしめさんと、人知れずこそ思しける。中納言は、扇、橘の人、見し面影をのみ忘るるひまもおはせぬ（マヽ）は、御宮仕へも身に染まず、物憂き心地し給へば、さながら人目もつつましく、この事知らせ給はば、思し嘆くばかりなれば、「一たび（按察姫君ノ）行方知らさせ給へ」と、神仏に御祈りはひまもなし。（中・五七二）

と、按察姫君は中納言の姿を発見するものの、それを知らせる手段はなく、一方中納言は、

⑥思すやうは、当時時めき給ふ御匣殿はいかなる人にてましますぞや。見まほしく思して、心にかけさせ給ひて、ある時、物のひまより御覧じければ、あたりも輝くばかりにて、さも美しくなまめき給へる御姿を見給ひて、さても行方なき人（按察姫君）の面影に似たりしやうに、思しそめてしより御心も空になりければ、なほ御心を沈めてのぞき給へば、……（中・五七三）

とあるごとく、御匣殿はかつての按察姫君ではないかと思い、命婦が「御匣殿の御手すさび遊ばしたる扇持ちて居給へる折節」（中・五七四）に、中納言が偶然やって来て、

⑦「持ち給ひし扇に書きたりし歌は、誰れ人の書き給ふぞや。よしありて見えし水茎かな」と（中納言ガ）のたまへば、「これこそ御匣殿書き捨て給ひし」とあれば、ゆかしと思して取りて御覧ずれば、

人知れず見し面影は変はらねど思ひも寄らぬ雲井なりけり

と薄地の香色の扇に書き捨て給ひしを、（中納言ガ）よくよく見給へば、見しやうなる心地して、うち返しうち返し御覧ずれば、行方知らで物思ふ人（按察姫君）の手によく似たるかなと胸うち騒ぎて、もしそれならば、いまだ忘れ給はざると、嬉しく思して、「この扇、しばし見まほしき事あり」とのたまへば、「『人にもらすな』と仰せあれば、かなふまじ」など（命婦ガ）申されしかば、「何しに人に見すべき」とて、逢ひ見し心地して、取りて、帰らせ給ひぬ。昔の扇に合はせ見給へば、つゆ違ふ所なし。（下・五七四―五七五）

と御匣殿が按察姫君であることを確信して、御匣殿が「里へ出で様」（下・五七七）の折、乳母の計らいにより再会し、中納言と御匣殿は結婚して、二人は幸福を獲得するのである。

とすれば、中納言が行方不明となった按察姫君と再会するに至った契機

は、〈逢う〉という意味を内包している〈扇〉に書かれた筆蹟と歌の内容だったのであり、これ以降は〈扇〉の内在的機能は消滅したのである。一方、按察姫君と中納言との出会いと情交を結んだ場所に〈橘〉が植えられていたのにはいかなる意味があるのだろうか。〈橘〉は〈トゲ〉のある常緑樹で、〈トゲ〉には物事が順調に進行ないしは展開していかない障壁、いわば〈障害〉という負的な意味が内包されているのであって、[注③]それが最盛期であったという点からも、極めて大きな〈障害〉が表象化されていたのだといえよう。すなわち、〈橘〉には按察姫君が行方不明となり、中納言がそれに対して懊悩するという状況が隠喩されており、その〈橘〉が常緑樹であるということに注意すれば、〈障害〉が永続するわけだが、それを打破したのが〈逢う〉という意味を内包している〈扇〉であった点を看過してはなるまい。換言すれば、〈トゲ〉のある〈橘〉という負的イメージを払拭したのが〈扇〉であったのだ。

以上のように、〈橘〉と〈扇〉という小さな〈装置〉が本作品の話筋を展開させていく大きな原動力であったのであって、〈橘〉と〈扇〉という小道具が緊密に連繋し、「今も昔も、神仏に仕うまつり、よろづ情おはします人は、行末めでたく侍るなり」（下・五八七）と宗教臭さによる教訓性とハッピーエンドで終幕するという、ある意味では単純さをぬぐえないにせよ、〈橘〉の負性を転換させたのが〈扇〉の持つ属性であったのであって、それが按察姫君と中納言とを幸福に導いた〈装置〉であったのだといえよう。

二　『しのびね』との異相―〈反しのびね型〉の影響―

『雨やどり』で按察姫君は〈継母〉から〈嫌悪〉されたために乳母の所にいるわけだが、『しのびね』の女君が〈継母〉による〈いじめ〉のために乳母の知り合いの仲介で宮中に逃亡した結果、帝の目に触れ、寵愛を蒙り、若宮を出産して中宮にまで至るのとは対照的に、女君と恋慕の間柄であった男君は宮中で女君の存在を確認するものの、帝寵を蒙っているのを知って、出家することになる。中務宮女である女君はいわば〈貴種流離譚〉の枠組みにより造型されているわけだが、按察姫君もこの枠組みによって造型されているといえよう。すなわち、〈継母〉の〈いじめ〉から逃れるために宮中に赴くという『しのびね』の過程を注視すれば、『雨やどり』も『しのびね』の影響下にあると考えられる。[注④]

ところで、按察姫君が中納言との間の若君を秘密裡に出産した後、女御所生の鬼子である若宮と〈交換〉してから自邸に帰った折に、はじめて〈継母〉ということばが用いられている。以下、〈継母〉の事例を列挙してみると、

㋑継母、のたまふは、「（按察姫君ノ）あやしの御風情かな。このほど、物忌みとて、いづくにやらん、籠り居て、いかなる事かしいだして、親のため口惜しく、恥ぢがましき事にこそ」と、のたまへば、……

㋺継母、「さもあらじ。『この夏の頃より、（按察姫君ガ）卑しき法師に語らひ給ふ』と、聞きしが、まことなりけり。殿聞き給ひて、『いかにいみじ』と、仰せられん」と、まことげに言ひ捨てて、うちへ入り給ひぬ。

㋩大納言、内裏より帰り給へば、継母聞えけるやうは、「姫君の有様、余りにあさましく侍りしほどに、この間、聞きし事ども申し侍る。我が子にも劣らず思ひたてまつりしに、そのかひもなく、この夏の頃より怪しき法師と語らひおはしけるが、『親の聞かせ給はん事も』とて、絹綾、色々の物ども贈りける

由、聞きしかば、余りに心憂さに、申し侍るなり。我が身、作り事にても侍らず。さだかに人の語りし」と、のたまへば、……

㋺父大納言、のたまふやう、「いかやうにもなれかし。ここもとへは、な呼び給ひそ。追ひ出だし給へ」と、仰せければ、継母、「さもありなば、法師に喜ばせんよりも、よろづ、乳母がしわざなれば、ただ乳母ばかり、追ひ出だし給へ」と、ありければ、……（以上、中・五六八）

㋭大臣、女御に申させ給ふやう、「若宮の御介錯には、按察の大納言の女こそは、心安くあらまほしけれ。この人、（継母ト）まましき仲なれば、親にもうとく侍れば、いとをしくて」など、のたまへば、……（中・五六九）

㋩（父按察大納言ハ）すぐに対へ渡らせ給ひて、乳母を呼び出だし給へば、乳母、心に思ふやう、また、継母の（按察姫君ニ関シテ）のたまふ事を、まことと聞こしめして、おはしたるにやと、胸うち騒ぎて、出でにければ、……

（中・五七〇）

㋣継母、「何か」とののしり給ひしに、かかる事のあれば、嬉しく思しけり。

㋡継母、いとど安からず思して、「同じ弟（おとと）なれば、三人ながら（内裏ニ）参らせ給へ」と、ありしかば、（按察大納言ハ）「残りの姫どもをば、召し給はぬに参らすべきか」と、のたまふ。

㋥継母をはじめて、そのかたの人々までも、「いかなりし事、出できぬらん」と、（按察姫君ヲ）そねましく、うらやましくも、思はれけり。（以上、中・五七一）

㋬継母、（按察姫君ト中納言トノ結婚ヲ）しばしこそは、心よからず侍れども、上々の御覚えはひとかたならず。大納言殿、かくばかりかしづき給へば、もろともにもてなし給ひけり。さて、中納言殿、大納言殿に、住み給はん事も、はばかり思しければ、昔の雨やどりをしつらひ給ひて、住ませ給ふ。（下・五七八）

となり、〈継母〉なることばは九例（その他に㋭の〈継母〉との関係を「まましき仲」とする個所が一例あり）用いられ、特に中巻に八例が集中しており、そこに〈継母〉の存在意義があろう。直接〈継母〉なることばはないものの、上巻冒頭で「この（継母所生ノ）姫たちの御かしづきばかりにて、大姫君（按察姫君）は、常に乳母のもとにぞ住み給ひける」（上・五五四）と紹介されているわけだが、㋥㋩に表象されているごとく、〈継母〉は按察姫君と法師との仲を吹聴しており、そこに〈虚偽〉による按察姫君へのいわば〈いじめ〉がなされ、さらに、「本文的には大きな異同はない」[注⑤]とされるものの、例えば㋬の個所は、萩野由之編『新編御伽草子』上によれば、[注⑥]

⑧継母暫しこそ心よからずおはしけれども、大納言かくばかりかしづき給へば、諸共にもてなし給ふぞ本意なき。中納言の方はいと狭しとて、雨宿の所をしつらひ、諸共に思ふ事なく明し暮し給ひけり。

とあり、両者において多少の本文の異同が生じている。悪役一点張りの『落窪物語』の〈継母〉とは異なり、この〈継母〉は按察姫君に対して直接的な〈いじめ〉を行使しているとは語られておらず、表面上は〈継母〉も大納言の意に添うようにふるまってはいるものの、傍線部「本意なき」ということばには〈継母〉の本音が草子地の形で語られているのであり、そこに実の娘ではなく、継娘の世話をしなければならない〈継母〉の不満が吐露されているのだ。

だが㋣の記事の直後に、

⑨大納言は北の方に「かく」と語り給へば、そねましく思して、「対の君（按察姫君）、さやうの御宮仕ひをしとげ給はんや。大納言殿こそ（按察姫君ヲ）女と

思しかしづき給ふとも、あらぬふるまひども（注―身分の低い法師との関係）を、し給ふをば知ろしめさで、御恥ぢをもかへりみ給はざるか」とのたまひければ、「度々、次第を申し奉りしかども、『ぜひともそれ（注―按察姫君）を』と、（女御ガ）のたまへば、そのうへは力なく、領掌申すなり。また、よくよく見候へば、我が子ながらも、さもあらまほしく見えず」と、（大納言ガ）のたまへば、……（中・五七一）

とあり、㋒の記事に続くわけだが、㋝の記事に〈継母〉が実の娘たちの宮仕えの話であると錯覚して喜んだものの、⑨の波線部のごとく、その内容を大納言から聞いて、実の娘たちのことではなく、按察姫君の宮仕えの話だったので、㋒の二重傍線部のように、「いとど安からず思し」たのだ。ちなみに、これら㋝㋒㋓の〈継母〉なる呼称の間になぜ〈継母〉ではなく、〈北の方〉なることばが用いられているのだろうか。〈継母〉が〈北の方〉と呼称されたのは、この⑨以外では前述したごとく、上巻冒頭部の人物紹介の個所だけである点から考えると、⑨の〈北の方〉の呼称は極めて重要な意味を内包していよう。〈継母〉は実の娘たちが大納言の娘という触れ込みで宮中に出仕できるのではないかと期待を抱いたために、夫である大納言の妻としての〈北の方〉という立場で語られたのではなかろうか。だが、その実現性が希薄であったために、㋒において再び〈継母〉の呼称で語られたのではなかったのか。とすれば、ここでは〈継母〉の一喜一憂する心中の動きが剔抉されようとしたのだ。すなわち、〈継母〉の起伏する心中が的確にあぶり出されているのであり、それを表象することばが前後の〈継母〉なることばとは整合しない〈北の方〉という呼称であって、それは揶揄的な色彩を帯びてくる。そこに〈継母〉という呼称に関する緻密な計算が働いていたのではなかったのか。

では、『しのびね』との決定的な差異はどこに生じているのだろうか。按察姫君は御匣殿として宮中に出仕するわけだが、そこで帝から恋慕されることはなく、『しのびね』の男君とは逆に、中納言は女君への帝寵が原因で出家することもなく、最後には按察姫君ともども幸福な生活を送るのである。一方、『しのびね』の女君は中宮になったわけだから、形式的には幸運と解せられようが、そのために男君の出家という悲劇を招来したがゆえに、内容的には悲哀というようなありようであったのに対して、『雨やどり』の按察姫君は前述したごとく、最終的には形式・内実ともに幸福な状況を獲得したのだ。これはいわば『しのびね』とは対照的であって、『しのびね』の話筋に対する〈反逆〉の試みであったとも解される。[注⑦] そのような意味において、〈継母〉は実の娘が入内するのに伴ない継子である姫君を母代として付き添わせたところ、帝が姫君に恋慕したために、〈継母〉は姫君を幽閉したわけだが、やがて助け出された姫君は最初に契った兵部卿宮が後に帝、姫君も中宮に至って幸福な一生を過ごしたという話筋の『小夜衣』と『雨やどり』とは同工異曲なのである。すなわち、『雨やどり』と、『小夜衣』における〈継母〉の〈いじめ〉の仕方には大きな差異があるものの、結末に至っての男女主人公の幸福的状況は類似しているのとは逆に、女君が中宮になるのとは引き換えに、男君は出家して再会できないようになる『しのびね』とは対照的であるがゆえに、『雨やどり』と『小夜衣』とは〈反しのびね型〉という位置に立脚しているといえよう。以上の点から、『雨やどり』と『小夜衣』の骨格は類似しているのであって、後者が前者に影響を及ぼしていると考えられる。

ところで、〈しのびね型〉という話式はかなり広く伝播していたものと

考えられる一方、『小夜衣』や『雨やどり』のように結末が幸福的状況で終了する作品も共存しているがゆえに、これらの物語を〈しのびね型〉として一括して把握することに対して筆者は疑問を抱くのである。基盤は同じであっても、途中から枝分かれして異なった結末に至るわけだから、〈しのびね型〉に対して〈反しのびね型〉というグループを示す名称を考えるべきではなかろうか。

また『しのびね』という題名は女君が宮中に赴き、男君を恋慕して忍び音を漏らしている状態を意味するのに対して、『雨やどり』の方は、十三例ある「雨やどり」の初例の冒頭部近くで、按察姫君が初瀬からの帰途、雨宿りしている個所に、

⑩いとやんごとなき男（中納言）の、車に乗り給ひて、簾うち上げて、この屋に入り給ふに、（按察姫君ハ）忍ばん方なくて、立ち給へば、車より降り給ふとて、この雨やどりはいかなる人やらんと、あやしみて見給へば、……

（上・五五六）

とあるように、主人公たちの出会いの契機が語られている点[注⑧]で大きな差異がある。従って、男君と別れた後の女君の状況を表象することば（「しのびね」）と男女主人公の出会いの契機を表象しているそれ（「雨やどり」）とは差異を内包しているのは当然であり、それが再び作品の結末の差異―〈しのびね型〉と〈反しのびね型〉―と脈絡しているのだといえよう。

三　〈濃縮近親相姦〉の可能性

〈近親相姦〉といえば既に允恭天皇の子である軽太子と同父で同母妹の軽大郎女との例が『古事記』（下巻・允恭天皇）、『日本書紀』（巻十三・允恭天皇）、『万葉集』（巻二・九〇）に語られているように、古代から文学の題材のひとつとして継続して扱われてきたのである。[注⑨]平安時代に入って『伊勢物語』四十九段に、

⑪むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ

と聞えけり。返し、

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな[注⑩]

とあるごとく、「妹」は同母妹と異母妹の二説があって決定しがたいものの、「うら若み」の歌の傍線部「ねよげ」には「根」と「寝」とがかけられており、兄の妹と共寝がしたいという願望が詠み込まれている。また、『篁物語』にも異母妹への恋が語られており、『うつほ物語』（藤原君巻）にも貴宮に対する同母兄仲澄の恋慕が語られ、仲澄は悶着して恋死にするわけだが、仲澄の場合は最初から同父同母を承知したうえでの恋慕であった。[注⑪]さらに、『源氏物語』（玉鬘巻）にも何も知らずに柏木が異母妹玉鬘に恋慕したことが語られている。

このように古代から同母、異母を問わずいわば〈近親相姦〉が恋の一翼を占めてきたわけだが、中世王朝物語でも最初は異父同母であることを知らずに男が女を恋慕した作品が輩出したのである。すなわち、『海人の刈藻』において若君（注―新中納言と藤壺中宮との密通の子）が姫宮（注―朱雀帝と藤壺中宮との子）との結婚を望むものの、二人の母である藤壺は二人が同母であるがゆえに拒絶し、また、『我身にたどる姫君』において二宮は異父同母の我身姫を何も知らずに恋慕したものの、音羽尼君が阻止するのである。このような系譜を継承しながら、『雨やどり』では若君（後に

春宮・帝）と姉君が互いに同父同母であることを知らずに結婚しようとする場がある。このことから、例えば『雨やどり』の語り手は軽太子と軽大郎女との同父同母同士による情交を念頭に置いて語ろうとした可能性も考えられる。すなわち、中納言と按察姫君との間に秘密裡に生まれた若君は、ほぼ同時期に女御の出産した皇子が「人の形にてはおは」（上・五六四）さない「かたは人」（中・五六六）であったために〈交換〉され、若君が帝となり、中納言が按察姫君と再会して結婚した後に生まれた姉君の方に入内を要請するが、按察姫君が拒否する。やがて帝はその理由を知って諦念するのである。

高倉天皇の中宮となり、安徳天皇を産み、壇の浦における平家滅亡に際して、入水したものの、助けられて都に送還された徳子（出家後は建礼門院。以下、この呼称を用いる）は、延慶本『平家物語』では、

⑫都ヲ出テ後ハ、イツトナク宗盛知盛一船ヲ棲トシテ、日ヲ重ネ月ヲ送リシカバ、人ノ口ノサガナサハ、何トヤラン聞キニクニ名ヲ立テシカバ、畜生道ヲモ経ル様ニ侍リキ。注⑫

とある一方、『源平盛衰記』（巻四十八「女院六道廻物語事」）に、源氏の追撃によって、

⑬讃岐国屋島に附て、大裏造などして安堵して候ひしに、そこをも源氏に被追落（ト）サて、一船の中に住居也しかば、兄の宗盛に名を立と云、聞きにくき事を云をも、……注⑬

と語られている。注⑭両作品は傍線部のごとく、若干の差異があるものの、宗盛・知盛と建礼門院とは同父同母の兄妹であって、そこで繰り広げられたのはいわば凝縮された〈濃縮近親相姦〉であったといえよう。この作品は、たとえそれが〈うわさ〉であったとしても、『雨やどり』とは時代的に近接しているがゆえに、この建礼門院と兄との〈濃縮近親相姦〉が『雨やどり』の執筆過程の中で想起された可能性も推測されよう。

『雨やどり』における帝と姉君の結婚は、成就はしなかったものの、血の凝縮された同父同母の兄妹が結婚することを意味するのであって、異父同母同士の結婚の可能性が語られた『海人の刈藻』よりも一段と〈禁忌〉の程度が上昇するのであり、同父同母同士という血の凝縮された状況が一層増加するのであって、いわば〈濃縮近親相姦〉の可能性が語られようとしたのである。これは〈近親相姦〉に関わる文学史においてまさに頂点に立つ事例であるといえよう。

以上のように、『雨やどり』の特徴のひとつは同父同母の兄妹の〈濃縮近親相姦〉へのアプローチであったと考えられるのではなかろうか。たとえ異父であっても同母の兄妹婚が犯すべからざる〈禁忌〉である以上、帝と妹君とが互いに内情を知らないこととはいえ、同父同母の兄妹の結婚の可能性が語られたのは、女御と按察姫君との出産児の〈相互交換〉に由来することでもあったのだ。それはまた、男女の〈交換〉が語られた『とりかへばや』やその変形である『有明の別れ』とも異なった趣向であり、それも成人における男女の〈交換〉ではなく、同性の〈嬰児〉による〈交換〉が〈濃縮近親相姦〉の可能性をもたらしたという点に、『雨やどり』の独自性が内在化されていよう。

注① 『雨やどり』の本文は室町時代物語大成（第一巻）により、私に表記の一部を改めた個所がある。なお、上中下は巻、漢数字は当該ページを示す。

②『古今集』の本文は新日本古典文学大系による。

③〈橘〉の持つ〈トゲ〉の意味に関して、「『逢坂越えぬ権中納言』と『花桜折る少将』とにおける男主人公の〈恋〉の行方をめぐって―冒頭における結末の暗示もしくは予告の提示―」（「学苑」二〇〇九・8。後に『物語文学集攷―平安末期から鎌倉へ―』新典社　二〇一三・2に所収）で触れたことがある。冒頭部で〈橘〉が提示される『逢坂越えぬ権中納言』と『雨やどり』との類似性を、影響関係も含めて考えてみるべきだろう。

④『お伽草子事典』（東京堂　二〇〇二・9）においても、『雨やどり』は【グループ】しのびね物語、しぐれ、（参考）木幡の時雨」として考えられている（浅見和彦執筆）。

⑤注④前掲事典。

⑥『新編御伽草子』上（誠之堂　一九〇一）では『今宵の少将』という題名で所収されている。

⑦大倉「『小夜衣』論―『しのびね』への〈反逆〉を中心に―」（「学苑」二〇一〇・8。後に注③前掲書に所収）。

⑧橘りつ「御伽草子「雨やどり」についての小考―東洋大学図書館蔵の奈良絵本を中心に―」（「文学論藻」第六十七号　一九九三・2）。

⑨垂仁天皇の后狭穂姫の同母兄狭穂彦王が妹后に天皇と兄のどちらに愛情を感じるかと尋ねたところ、兄に対する愛情の方が深いと答えたために、謀反をそそのかしたものの、妹はそれを実行できずに、皇子を天皇に差し出し、兄に殉じた話（『古事記』中巻・垂仁天皇、『日本書紀』巻六・垂仁天皇。『水鏡』上・垂仁天皇の条にも結末が省略された形で記されている）から考えると、〈濃縮近親相姦〉的色彩が濃厚であると思量される。

⑩『伊勢物語』の本文は新編日本古典文学全集による。

⑪同父同母の妹であることを最初から承知のうえでの恋慕は、『源氏物語』（総角巻）においても匂宮の女一宮に対するものとして語られている。

⑫延慶本『平家物語』の本文は勉誠社版（一九九〇・6）により、私に表記の一部を改めた個所がある。

⑬『源平盛衰記』の本文は有朋堂文庫（一九二二・5）による。

⑭既に佐伯真一『建礼門院という悲劇』（角川選書　二〇〇九・6）に詳しく指摘されている。

（おおくら　ひろし　日本語日本文学科）